

知られざる日中関係

岩増 弘三

(社) 日中科学技術文化センターと方正友好交流の会による時宜を得た企画のお蔭で、中国黒龍江省のハルピン東方約180Kmにあり、道路標識まで日本ソックリの高速道路で結ばれた方正県にある「日本人公墓」を、7月に訪れた。「百万戸計画」の国策で満州に移住された開拓民は敗戦で悲惨な境遇に追いやられたことは、よく知られている。その内、約五千人が、零下40度、飢え、栄養失調、発疹チフスなどで、方正で亡くなられた。それから数年たち、累々たる白骨の山を見た残留婦人が埋葬したいとの願いを政府に出した。

まだ日本の侵略への恨みが消えていない1963年ではあったが、当時の周恩来首相の理解により、この公墓が建立された。この一角には、生き残った孤児が建立した「中国養父母の墓」と、高粱が主食であった寒冷の地に、人は無理と言ったにも関わらず、寒冷地に向けた稲を作り出し、黒龍江省を米作中国一にしたとして中国では非常に尊敬されている藤原長作氏の墓もあった。その後に乗車したハルピンから瀋陽（旧奉天）までの新幹線の車窓からも、どこまでも続く稲作が見えた。

各種の毒ガスや細菌戦の研究や実戦での使用を行った731部隊の施設跡を、ハルピン郊外で見学した。実験機材と丸太と称された実験用人間を3000人連れ込むために、鉄道線路まで引き込んだ広大な用地において、大きな組織で広く系統的に研究が行われていた状況が写真や資料で説明されていた。中国の数十ヶ所で実際に爆弾を投下して効果を確認したにも関わらず、米軍に資料を引き渡すことを条件に極東裁判で訴追しない約束があったので、米軍は朝鮮戦争で実験を行った。その投下され回収された爆弾が展示されていた。

ハルピン市内は、滞在3日目に、オリンピックの聖火リレーが走るのも、繁華街は花や旗で華やかに飾られ、人々も豊かで幸せな表情で生き生きとして、発展中の中国を羨ましく思わせた。ハルピンから瀋陽（旧奉天）までは、日本の新幹線と外観や車内がほぼ同じのフランス Alston 社製の車両で移動したが、車内に表示される速度は、最高188kmであった。

瀋陽からバスで撫順戦犯管理所を訪問した。終戦後、多くの旧日本兵はシベリアへ移送されたが、中国で犯罪を犯した将官35名を含む982名が中国側に引き渡され、撫順戦犯管理所に収容された。焼き払った家屋4.4万戸、略奪した食糧370万トン、殺害した人員85.7万人など、平和な時には考えられない規模であった。しかし、中国側は、日本人であるからと主食を高梁でなく貴重な米で提供し、医療、娯楽など充実した内容で厚遇した。刑の軽い人から帰国を認め、1954年には全ての戦犯に特赦を宣言して1人の刑死者も出さずに全員帰国させた。旧満州国の溥儀皇帝も同じ建物の中に収容され、彼の弟である溥傑が設計したという瓢箪池や橋のある小庭園も当時の状況のままに保存されている。ここに収容された日本人は、思いも掛けない厚遇に感謝し、自分の過去を反省し

て、帰国後「中国帰還者連絡会」を組織して「平和と日中友好に貢献する」をモットーとして、日中友好促進の事業を展開してきた。家族を伴って再訪したり、構内に記念碑を建てたりしている。

その後、「平頂山事件」の記念館を訪れた。1932年9月に、撫順炭鉱の破壊行為を行ったグループが逃げ込み、それを匿ったとの嫌疑から、炭鉱に隣接する平頂山村落民を「集合写真を撮ってあげる」と偽って丘の上に誘導して、カメラに似せて黒いカバーを掛けた軽機関銃で村民を虐殺した記念館である。多数の発掘した人体や身に付けていた衣類などを、現状のまま屋根で覆って展示している。殺害された人数は諸説があり、中国側では発掘をもとに約3000人と言っている。

続いて瀋陽市内にある「9・18事変博物館」を見学した。1931年9月18日に、関東軍がこの地の柳条湖で列車を爆破して、それを張学良派の陰謀として満州事変を引き起こしたことを記録に残すための、1999年に建設された大規模な博物館であった。江沢民主席が大書したスローガン「勿忘9・18」が壁面を飾り、入館すれば『我々は国辱として未来永劫忘れない事を誓う』と大きく書かれていて、驚きを禁じ得なかった。大きな館内の展示も、日本軍の残虐ぶりを、多数の写真、当時の新聞、関連する証拠品を並べて展示していた。日本人には不愉快ではあるが、人間を殺すことを職業とした軍隊というものの狂気振りを嫌というほど見せつけられた。毎年9月18日は、これに関するデモなども行われ、日本領事館からは、外出しないようにとの勧告も行なっている。時として、いまも中国で反日デモが発生する原因も理解できた。

このような記念碑は、辻正信参謀の命令で、シンガポールの華僑5千人（日本側の推定であり、現地側は4-5万人と推定）を殺害したことを追悼する背の高い「血債の塔」がシンガポールの海岸の景勝地にあることや、真珠湾に撃沈されたアリゾナ号が艦と運命を共にした多くの将兵とともに記念として展示されていることを考えると例外ではなく、逆に、日本の広島や長崎の記念碑は日本人的な例外的な意思表示ではないだろうか。日中の要人の会談では、必ず「両国は一衣帯水の隣国で、2000年に亘り深い関係を持ち云々」といかにも素晴らしい関係があったような挨拶で始まる。しかし、現実には恒久的な反日記念碑の存在に対応していかなばならぬ問題であることを忘れてはならないと思う。日本も明治生まれの先輩方はスケールも大きく立派な方々ばかりであった。中国も建国当時の人々の偉大さに比べて、時代と共に指導者の人柄が変わることを痛感しました。

「参考」井出孫六：中国残留邦人 - 置き去られて六十余年（岩波新書）

追記：中国の最近の住宅は、上海の漁村が一大開発エリアに変えられた浦東地区の見渡す限りの高層住宅に代表されるように、どの都市でも高層住宅が整然と建築されて行くのに割目させられ、国民に適切な住宅を提供することを重要な責務と考える社会主義の良さを印象付けられる。北朝鮮の首都ピョンヤンでも大通り沿いに整然と建てられた高層アパート群が最も印象に残る光景で、中国との類似性を感じる。英国のFinancial Timesによれば、太陽電池の設置量では、2006年時点でドイツが世界の55%を占め、2位の日本は1

5%に過ぎず、次いで米国、スペインと続くが、2007年の太陽電池の生産高では中国が世界第一であり、これに日本、ドイツと続きます。中国の新築の高層住宅の屋上には建築時から太陽電池のパネルが取り付けられている。

また、731部隊の旧跡を訪ねる道筋では、先ず、いかにも快適に見える大規模な新しい高層住宅群が続き、それを過ぎると、米国のシリコンバレーのように、広い緑の中に、一向に工場らしくない多様な感じの良い建物が続く。生活と通勤に便利な所に従業員用の住宅を造る社会主義に感銘を受けた。何事においても一人でも反対があれば何もしない日本が世界から取り残されていくことも残念だ。最近の中国の労働集約型の工場は、カンボジア、ベトナムなどの一層開発の遅れている国々へ移動していて、本国では技術力の高い産業へと移行しているとの記事やニュースを見るにつけ、日本の産業が未だに中国や韓国で生産されるものと一心に競争していて、先進国のみ可能な分野への移行が進まないのを危惧するのだ。

<いわそこうぞう、BNNテレコム支援協議会（NGO）理事>



731 部隊罪証陳列館前景（撮影：大類）